

哲学的治療において必要なもの

What is needed in philosophical therapy

(溝越 大秦)

Abstract

The primary question that lies here is "What is needed in philosophical therapy?" In L. Wittgenstein's "Philosophical Investigations", philosophical problems are regarded as an illness to want to look at things in particular way. Wittgenstein compared philosophy to therapies of such an illness. Such an illness means being captured by a certain type of thinking. Because philosophical problems occur at a language level, philosophical therapy has to focus on the connection between words and activities with this to emancipate people from such a type of thinking. A Language- game achieves this by functioning as a model to evince the connection.

(1) 研究テーマ

本論文のテーマは、ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン(以下 L.W.)『哲学探究』(以下 PI)における哲学的治療である。哲学的治療において何が必要なのか、が本論文の問題意識である。

(2) 研究の背景・先行研究

哲学においては、古来より様々な問題が扱われている。その問題とは、存在とは何か、我々はなぜものを見られているのか、科学はこの世界をどの程度解明できるか、我々はどのように生きるべきか(これは倫理学の問いとも取れる)などである。これらの問題についてあらゆる哲学者たちが論争を繰り広げてきた。しかし、どの問題も明確な回答を与えるにはあまりにも困難であろう。

L.W.はこのような困難に対して次のような態度で接するよう語る。

哲学におけるあなたの目的は何か。-ハエにハエとり壺の出口を示してやること。(PI § 309)

困難に喘いでいる、つまり哲学的問題について右往左往している人に対してL.W.は哲学的問題を脱し、解決するための出口を教えることに哲学の目的を見出す。彼は哲学者が取る態度を次のようにも例える。

哲学者は、病気をとりあつかうように、問いをとりあつかう。(PI § 255)
哲学の方法が一つしかない、というようなことはない、実にさまざまな方法があり、いわば異なった治療法があるのである。(PI § 133)

つまり、L.W.にとって哲学はいわばさまざまな病気をさまざまな手段で治療するように、さまざまな哲学的問題をさまざまな手段で解決するものなのである。ではどうすれば哲学的問題が解決されるのであろうか。彼は以下のように述べる。

これらの問題 [=哲学的問題] ¹は、[…] われわれの言語の働きを洞察することによって解決される […] これらの問題が解決されるのは、[…] とうに知られていることを整頓することによってである。(PI § 109)

もしわれわれが言語という現象を、原初的なその適用法にそくして研究し、その適用例において語の目的とはたらきを明瞭に見渡すことができるのであれば、そうした煙霧 [=哲学的問題] は霧散する。(PI § 5)

哲学的問題は言語についての誤解から発生し、言語的なレベルで、既に知られていることを洞察することによって解決される。L.W.は語の原初的な適用例における語の使用を洞察するために、以下のような言語を想定する。

一つの言語を考えてみよう。その言語は、建築家 A とその助手 B との間
の意思疎通に役立つのでなくてはならない。A は石材によって建築を行なう。石材には台石、柱石、石版、梁石がある。B は A に石材を渡さねばならないが、その順番は A がそれらを必要とする順番である。これらの目的のために、二人は「台石」「柱石」「石板」「梁石」という語からなる一つの言語を使用する。A はこれらの語を叫ぶ。-B は、それらの叫びに応じて、もっていくよう教えられた通りの石材を、もっていく。-これを完全に原初的な言語と考えよ。(PI § 2)

関口(1996)はウィトゲンシュタインが PI § 2 で語の使用に目を向けさせるために、「大工とその助手という二人だけの共同体における、[上の引用にある] たった四つの語からなる(完結した)言語の設定という、単純化と省略と誇張を施した記述」(関口(1996), p.204)を導入したと述べる。

それでは、哲学的治療は哲学的問題に直面している者にどのようなものを振り返らせなければならないのであろうか。ならびに、哲学的治療において必要なものは何か。本論文は L.W.が想定する哲学的問題の特徴と、それに対するいわば治療のアプローチについて、本論文は Kuusela (2008)と Morris (2007)の議論に注目する。

Kuusela(2008)は、一定の像の観点で事物の捉えようとする意欲(will)が哲学的問題の特徴であるとし(Kuusela, 2008, p.45)、哲学的治療は当人を「言語（あるいは思考）とは何か比類なきものである(PI § 110)」というような問題のあるものの見方から解放させるものに位置付ける。その解放のために哲学的治療は一つの語における異なる使用、あるいは一つの使用における異なる語を導入することを目指す。

Kuusela(2008)は哲学的治療が言語使用の個別的な例の整頓(arranging)によって、一定のものの見方に捉えられている者に哲学的問題を解消するための新しい見方を明瞭に提示する整理(ordering)がなされることによって達成されると述べる²。(Ibid., p.45, Ibid., p.89) 整頓、そして整理によって事物の多様な面が現れ、単一の概念下における多様な事例を見ることができる。(Ibid., p.234, 235) これにより普遍的な定義や共通した特徴からその概念下の事物を捉える「特殊な」ものの見方を拒絶し、語の使用を正確に理解することができる。

Morris(2007)によれば、哲学的治療には主に二つの方法がある。一つは文法的記述の訂正及び正しい文法的記述である。文法記述の訂正と正しい文法的記述について彼女は、“This” や “That” が真の固有名だというラッセルの主張に対して、“This is N” と人は言うが、“This is ‘This’” と言うことはない、という L.W.の文法的記述を例に挙げる(Ibid., p.75)。これにより、哲学的偏見により得られた平静が打破され、ラッセル（あるいはラッセルを支持するもの）に哲学的偏見を検証させると彼女は指摘する(Ibid., p.78)。

もう一つはものの見方の代替案を提供することである。彼女は例として、PI § 67 の引用から、「何か共通するものがなければならない」という考えに縛られている者に対して一本の繊維が一本の糸に通らずとも、多くの繊維が糸の強さをもたらすというアナロジーを挙げ(Ibid., p.75)、L.W.が当人に「代替案の可能性を認めるよう説得する(Ibid., p.80)」のであると主張する。

両者の解釈を踏まえると、哲学的治療は言語を普遍的な理論や共通の特徴でとらえることを拒否し、治療を受ける者の言語に対する誤解の種類、いわば「症状」に応じて多様な個別的事例に目を向けさせ、思考の傾向を矯正し、語の使用を正確に理解させることによって成立するといえよう。

例えば、「ゲーム」という語を理解するために L.W.は PI § 66 でカードゲームやチェスを挙げ、勝ち負けのあるものと言ったあと、球戯の例を挙げ、「子どもがボールを壁に投げつけて再び受けとめている場合」(PI § 66)には勝ち負けという特性が消滅することに注目している。そこで技術という語でさえ、チェスとテニスでは全く違う様相を見せることも挙げる。

PI § 66 は「ゲーム」という語の使用の個別的事例を整理し、「ゲーム」の「アスペクトの変化」(関口(1996))を対話者に起こさせているのであり、「ゲーム」に対する特殊な見方および偏見を取り除いているのである。

ここで本論文は一つ疑問を投げたい。哲学的治療で個別的事例によって「語の使用」に目を向けさせると述べたが、より詳細にこれらを把握すべきではないか。語の使用は語と事物の単なるつながりではなく、使用者の要素に強く関わるものであろう。したがって、言語使用の個別的事例を提示しても、使用者のどの要素に目を向けるかが明確でなければ、治療を受ける者に混乱をもたらすであろう。哲学的治療で、我々はどこに目を向けさせるべきか。

それは語に伴う行為である。L.W.は、「子どもがボールを壁に投げつけて再び受けとめている場合」(PI § 66)やチェスとテニスの技術の違いなど、行為を見て、「ゲーム」という語に関する考察を展開している。L.W.は言語および語の使用において語に伴う行為を重要視しているのではないか。Kuusela(2008)、Moorris(2007)、関口(1996)は取り立てて論じることはないが、本論文は語の使用を理解するためには語に伴う行為が重要なキーワードであることを提唱したい。

(3) 筆者の主張

(3)では、語に伴う行為が語の使用の成立にどのように寄与しているかを、PI で述べられる言語の習得過程に注目して論じる。そして、再び PI § 66 の例を考察し、語に伴う行為に注目させることに必要なものを提示する。最後に、哲学的治療の成立に必要なものを挙げる。

PI § 2 における語の使用は、たとえば、ただ「台石」「柱石」「石板」「梁石」と突然発声しただけで見出されることはない。これら 4 つの語の使用は A の叫びを受けた B が台石、柱石、石板、梁石を A の元に持ってくるにより見出されるのである。

PI § 2 の言語の習得過程について L.W.は以下のように記す。

言語のそのような [=PI § 2 に挙げられる] 原初的諸形態を、子ども³は、話すことを学ぶときに用いる。その場合、言語を教えるということ

は、それを説明することではなくて、訓練するということなのである。(PI § 5)

子どもたちは、事前の説明によってではなく、「そのような活動を行い、その際そのような語を用い、そのようにして他人の言葉に反応するよう、教育される(PI § 6)」。つまり当該の言語ゲームにおける他の参加者による言葉・活動への反応をとおして語の使用が教えられ、語の用い方が訓練される。例えば、PI § 2 で記述されている言語ゲームにおいて「台石」と A が叫んだ時、それを聞いて持っていく時、間違っ柱石を持って行った時に、元の位置に戻り、ふたたび A の所に石材を持っていくなどの活動を通して、B は「台石」という言葉を聞き石板でも柱石でも梁石でもない台石を A に持っていくことを学ぶことが挙げられる。

さらに、語の使用を学ぶ際、「直示的教示」が重要であると L.W.は以下のように指摘する。

訓練ということの一つの重要な部分は、教える者が諸対象を指さして、子どもの注意をそれらのものへ向け、それとともに何か語を発すること、例えば「石板」という語を、そのような形をしたものを提示する際に発音することから成り立つであろう。([…]わたくしはこれを「語の直示的教示」と呼びたい。[…]) (PI § 6)

直示的教示によって、子どもには語と提示されたものが表象のような形で対応するといえるかもしれない。ただし、語の使用を明瞭に理解する上で、事物との対応関係が語に伴う行為よりも重要であるわけではない。L.W.は以下のように答える。

たとえ直示的教示が表象を喚びおこすのだとしても、[…]しかし、それは一定の教育を伴って (原文ママ)、はじめて可能になるのである。異なった教育が行なわれれば (原文ママ)、これらの語の直示的教示が同じであっても、まったく異なった理解が生じるであろう。(PI § 6)

直示的教示を全く同じ方法でおこなったとしても、A が叫んだ語に B が応えて、直示的教示によって提示されたものに「×」というような印をつけるという教育や訓練が行われれば、PI § 2 で挙げられる言語ゲームとは全く違う言語ゲームになり、B による語の使用の理解も全くもって違うものに

なる、という言語観なのである。

したがって、L.W.の言語観において子どもが語の使用を理解するためには語と事物の対応関係よりも、ある言語内で語によって引き起こされる行為が重要であると結論づけられる。ところが、この言語観は PI §2 の原初的な言語に適用されるものである。我々はこの言語観を、哲学的治療で扱われる、高度な概念的思考が要求されるような言語形態に拡張できるのか。

このような問いに対して、高度な教示を要求されるからこそ、語の使用を理解する際に、ある言語内で語によって引き起こされる行為が重要であると本論文は主張する。語の使用の習得について取り上げている Luntley(2013)の議論を援用しながら以下の段落でそれを明らかにする。

ある言語内の他の参加者による言葉・活動への反応をとおして語の使用が教育され、訓練される過程を Luntley(2013)は stimulus-response(SR) training (以下、SR 訓練) と呼ぶ(Luntley, 2013, p.45)。SR 訓練は以下のようにはたらくと指摘される。SR 訓練は因果的に決定された反応のパターンや S(stimulus) 下で R(response)を返す傾向を確立する。(Luntley, 2013, p.45) 例えば、PI §2において B は A が「台石」と叫ぶこと(S)を受けて石を持って行くこと(R)を通して「台石」のはたらきを学ぶのである。

ただし、言語を学ぶ手段は SR 訓練だけではない。Luntley(2013)は、PI §6-10 では、より洗練された訓練の考え方が扱われると指摘する。SR 訓練では、訓練を受ける者に対して、刺激を受けて規則的に反応することが要求されるのみであるが、PI §6-10 の訓練では注意されている対象へ能動的に反応し、行為を選択する能力が要求される。(Ibid., p.45)

以上から、より高度な教示を必要とする言語であればあるほど、教示を受ける側により多くの行為を選択せねばならないことが分かる。すなわち高度な言語形態を理解するケースだからこそ、ある言語内で語によって引き起こされる行為が重要になる。したがって、哲学的治療を行う際、治療を施すものはある言語内で語によって引き起こされる行為に目を向けさせることが必要なのである。

前段までの議論より、問題を起こしている語それぞれについて、行為を伴う訓練を行うことが哲学的治療の望ましい形と言える。しかし、我々には体力、時間、効率など様々な問題が発生する。そこで、再び、PI §66 で L.W.が「ゲーム」と名のつく様々な具体例を挙げ、「考えるな、見よ!」と語る例について考察する。

PI §66 に挙げられるような、「ゲーム」という語に伴う行為を「見る」ことはもはや語に伴う行為の擬似的な訓練である。擬似的な訓練は、「子どもが

ボールを壁に投げつけて再び受けとめている場合」(PI §66)を想定し、「ゲーム」という言葉に能動的に行為を選択し、使用を理解する過程である。

それを実現する道具としても記述された言語ゲームが用いられる。言語ゲームは「言語と言語の織り込まれた諸活動との総体(PI §7)」であるため、記述された言語ゲームというモデルを通した語に伴う行為に関する擬似的な訓練によって哲学的問題を抱える者は語の使用を明瞭にすることができる。語の使用が明瞭になった者は哲学的問題から解放されるであろう。以上のことより、記述された言語ゲームを道具として用いた語に伴う行為の擬似的な訓練哲学的治療において必要なものなのである。

(4) 今後の展望

哲学的治療を受けた者は、は言語への誤解を捨てて、正しい理解へと向かう。言語への誤解には言語に対する過信のようなものも含まれるであろう。言語に対する過信とは、本来言語で表現できないものも言語で表現することができるという種類の誤解である。

治療を受けた者が、当該の哲学的問題を言語に対する過信であるとして放棄した時、その治療はあくまで当人にとってのみ、あるいは同じ言語（英語や日本語、ドイツ語など）を話す者にとってのみ、もしくは同じ文化・慣習を共有するものにとってのみ適用できるのか。それとも、あらゆる人間に適用できるのか。

この問題は、前期 L.W.哲学において重要な「語りえない」という語について拡張することができる。本論文の哲学的治療の立場に則って言う「語りえない」とはすなわち、本来言語で表現できないにも関わらず、言語に対する過信から生まれた問いに対する形容である。『論理哲学論考』（以下 TLP）のある種数学的な言語観は、言語を普遍的な定義や何か共通した特徴で捉えていたものであった。TLP も PI と同様哲学的問題の放棄に注力したものであるが、言語に普遍性を求めた時点で「語りえない」という語の使用に哲学的問題を招く独断が残されているかもしれない。

個別的事例を重んじる PI の言語観では、言語に対する過信がどのように取り除かれていくかを TLP より詳細に説明することができよう。すなわち誰に、どの文化圏の言語使用者に、そして人類全体にどのような治療が可能なのであるか。あるいは「文化」や「人類全体」というようなカテゴリーは無用であり、個々人に対する治療のみが個々人に応じて成立するものなのだろうか。

上記の問いに答える際、「語りえない」として哲学的問題を放棄する過程に

TLPとは違った過程を見出す可能性があるだろう。この問題はTLPとPIそれぞれをより正確に理解すること及び両者のつながりをより明確にすることにつながると言える。

(大阪大学)

注

- 1 引用での [] 内はすべて筆者による補足。
- 2 “ordering”は哲学的問題に対して新しくものの見方を「秩序づける」という意味を強調するために、物の順序を正す「整理」の訳語を、“arranging”は言語の個別的事例を用意し、偏ったものの見方をする相手に対して見せるあるいは考えさせるために事物の配置を整えるところに注意して「整頓」の訳語を適用する。
- 3 邦訳は「子供」であるが、筆者により「子ども」と修正している。

(5) 参考文献

- ・Ludwig Wittgenstein, 2010, *Philosophical Investigations*, translated by G. E. M. Anscombe, P. M. S. Hacker and Joachim Schulte, revised fourth edition by P. M. S. Hacker and Joachim Schulte, Wiley-Blackwell (『哲学探究』、藤本隆志訳、1976、『ウィトゲンシュタイン全集 8』、大修館書店)
- ・Ludwig Wittgenstein, 2009, *Logische-Philosophische Abhandlung Tractatus logico-philosophicus*, Suhrkamp Verlag GmbH (『論理哲学論考』、奥雅弘訳、1975、『ウィトゲンシュタイン全集 1』、大修館書店)
- ・Oskari Kuusela, 2008, *The Struggle against Dogmatism: Wittgenstein and the Concept of Philosophy*, Harvard University Press
- ・Katherine Morris, 2007, “Wittgenstein’s Method: Ridding People of Philosophical Prejudices”, Guy Kahane, Edward Kanterian, Oskari Kuusela (Editor), *Wittgenstein and His Interpreters: Essays in Memory of Gordon Baker*, Wiley-Blackwell; 1 edition
- ・Michael Luntley, 2013, “What’s doing? Activity, naming and Wittgenstein’s response to Augustine”, Arif Ahmed (Editor), *Wittgenstein’s Philosophical Investigations: A Critical Guide* (Cambridge Critical Guides), Cambridge University Press
- ・関口浩喜, 1996, 「展望とアスペクト」, 日本哲学会, 『哲学』第 47 号, 256-265